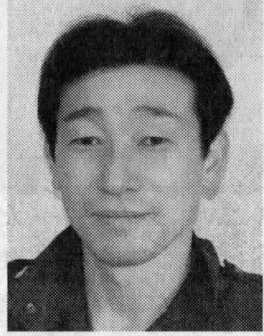


卓見 異見

PDエアロ
スペース社長
緒川 修治



おがわ・しゅうじ 01年(平13)東北大学院航空宇宙工学修了。三菱重工業で航空機、アイシン精機で自動車エンジン系部品の開発を担当。07年、純民間で宇宙飛行機を開発するPDエアロスペースを設立し社長就任。名古屋出身41歳。

半年に及んだ本コーナーへの奇稿も今回で最終回。最終稿は原点に立ち返り、筆者がなぜ無謀なベンチャーによる宇宙機開発に挑戦をするに至ったかを述べたい。

空への憧れが原点に

筆者は子供の頃から起業を考えていたわけではない。小中高から大学生までパイロットに憧れ、官民を問わず多くのパイロット採用試験を受けてきた。だが合格には至らなかった。

その後も航空宇宙業界に身を置きたく、作る側に回り、幸運にも新

チャレンジスピリッツ

型航空機の開発に参画できた。時期を同じくして、宇宙飛行士の募集が始まり、今度はこれを目指した。2度受験したが、ここでも合格しなかった。そこで学術的バックグラウンド、専門性を強化するために、大学院に入り直した。この時28歳である。しかし修士修了後の2003年、スペースシャトル・コロンビア号の空中爆発事故が起り、日米の宇宙開発計画は大きく停滞。宇宙飛行士の採用機会も止まってしまった。

そのような中で、米国のベンチャーが独自に宇宙機を開発し、高度1000*1に到達させる快挙を成し遂げたニュースを耳にした。

この時初めて「宇宙開発を独自にやる」という選択肢があることを

知った。当初は平日日中は企業に勤めながら、休日や夜などの時間を使って研究を行っていたが、これではビジネスとして進めるには限界があると感じ、起業した。加えて、筆者の父が個人(自宅)で長年、独自にジェットエンジンの研究をしており、小規模ながら研究開発環境があったことも決断要因の一つである。

問題を先送りし、道半ばの身で、偉そうなことは言える立場にないが、何事も「始める」に遅いことはないと考ええる。大上段に立ったものでなくてよいので、まず

は始める、勇気を持つべきだ。

得るものが速く濃く

動くことで状況は時々刻々と変化していく。行動することの最大の利点は、自分が求めているものが入ってくるスピードや質が劇的に変わることである。何十倍も速く濃いものが得られる。昨日できなかったことが、今日できるようなことも、しばしば起る。

しかし、必ず壁にぶつかる。事の大小にかかわらず、うまく行かないことも多い。むしろうまく行かないことの方が多い。ただ、自分でやってみようと思ったことなので、ぶつかった壁を乗り越えようとする意思が自然に働く。要は気の持ちようだということに気が

何事もダメ元の発想で!

く。こういった経験を少しずつ積んでいくことが重要で、壁を乗り越えること自体はそんなに重要ではない。行動しないと事態は何も動かないが、行動した結果、たとえそれが失敗であっても、何か動く。もともとなかったもの「ダメ元」なので、やった方が断然いい。ダメ元の発想こそが、行動障壁を低くするキーワードである。

批判にめげず前進を

また、行動すると必ず批判が出るものである。いろんな人がいろいろなことを言う。心配をしてくれる、忠告してくれるなど、気持ちには非常にありがたい。周りの意見を聞くことは重要だと思うが、ここはあえて乱暴な言い方をする、聞く耳は持たなくてもいいくらいがちょうど良い。坂本龍馬の「世の人は、我を何ともいわば言へ」である。誰もやらないことをやろうとするのだから、「やめておけ」と言われるのは当たり前であり、理解もされない。

壁にぶつかり、人の批評を受け、先が見えない不安の中で行動・挑戦を続けることは、容易なことではない。なので、すべての人に人生を賭けて、挑戦する道を歩むべきだとは言わない。ただ、日常の一つひとつの出来事に、挑戦する機会はいくつもあ。その一歩は、是非、踏み出してほしい。

宇宙機開発を試みる宇宙ベンチャーの視点で、宇宙産業の活性化を少しでも促せないかと、切り口を変えて異見を述べてきた。最後は、異見でも卓見でもなく至極一般的な話で、恐縮の極みであるが、筆者の思考の原点である。すぐに何が変わるというものではないが、例え小さくとも、歩みを止めてしまっていないかと思っている。これからでもできることを探して、諦めずに挑戦していこうと思つ。

(次回から執筆陣が代わりまます)